「キリストの平和」

“그리스도의 평화”

エフェソの信徒への手紙　2章13～22節

聖学院大学　キリスト教センター主事　松本周

「平和の祈り～戦後70年を覚えて」と題しシリーズ礼拝が持たれています。その第6回目として、聖書からの語りかけを聞きたいと思います。

「平和」について、「戦後70年」について、日本・日本人としての視点からだけでなく、私たちの大切な隣人であるアジアの方々にとっての「平和」と「戦後70年」についても、覚えたいと思います。その思いを、本日の奨励題に込めました。

先月、私は韓国で最初に設立されたキリスト教会の開催した、学術シンポジウムに参加する機会を与えられました。その会では、戦後70年をふまえ、「共に歩む東北アジアキリスト者青年：平和の第一歩『統一』」との主題のもと、韓国・中国・日本の青年たちが集まりました。そのプログラムを通じて、改めて、韓半島・朝鮮半島にとっての戦後70年、そして日本との関係について考えさせられました。

韓半島の戦後70年、それはそのまま分断70年を意味します。1945年8月15日、日本の敗戦は、韓半島の人々にとって日本の支配からの解放でしたが、それを喜ぶ間もなく北緯38度線を境に、北をソ連、南をアメリカに分断統治されます。さらに1950年には同じ民族同士が、南北に分かれて戦争をする、日本で〈朝鮮戦争〉韓国で6・25と呼ばれる悲劇が起こりました。このときアメリカ軍の飛行機は、日本の基地から飛び立っていきました。更に日本は、アメリカ軍からの注文に応じるための生産活動を活発にしたことにより、日本は経済成長のきっかけをつかみ、今日のような経済的に豊かになった社会へと至りました。

戦後70年にあたり、この間における日本の経済的繁栄が、お隣の国の戦争をきっかけとしたものであったこと、また日本が70年間戦争をせず平和であったということも、括弧付きの平和にすぎないこと、つまり直接武器を手にしなくても日本は様々な形で、戦争に関与したのだということを、直視しなければならないと思わされます。

その上で、礼拝において私たちは、聖書の言葉を通して、真の平和をアジアに造り上げていく使命を果たすために、何をなすべきかを示されてまいりたいと願うのです。

先ほど共に聞いた聖書の箇所に、もう一度目を留めたいと思います。エフェソの信徒への手紙2章14節で「キリストはわたしたちの平和であります」と宣言されます。さらに19節では「あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、神の家族である」と言われます。お互いを外国人と言い合うことのない共同体、キリストによって一つに結ばれた神の家族があり、そこにこそ真の平和が実現すると語られています。これは教会の姿であり、究極的には神の国の姿です。

キリストの平和とはなにか。それは十字架上のイエス・キリストのお姿に現わされています。ご自身に向けられた敵意を、人に向け返すことなく、すべての敵意をご自分に引き受けて滅ぼされた。それにより人の敵意を無力なものにしてしまわれた。この十字架のキリストに結ばれることにおいて、私たちは真の平和を知り、その内に生きることができる。教会の十字架は、このキリストの平和を証ししています。

先程、韓国・中国・日本の青年たちがシンポジウムに集まり、平和の第一歩『統一』を祈ったことに触れました。何気ないことのようで、大きな出来事がそこには起きています。歴史的に深く関わりつつ、特に近現代史において互いの間に大きな傷を抱えている三カ国、北緯38度線を挟んで敵味方に分かれ戦った国々の青年が一つ所に集まって、東アジアが一つとなるために語り合い、祈る。それを可能にし、その祈りを実現へと至らせるのは十字架のキリストそのお方に他なりません。キリストにおいて一つとされることを知っている者たち、もはや誰も外国人でない国、神の国の姿を聖書から知らされている者たちが、祈り求めることのできる、まことの平和がある。礼拝において、このことを確認したいと思います。アジアそして世界の未来に平和を築く出来事は、他の場所ではなく礼拝から始まるということを。キリストの平和、私たちのために十字架に身をささげてくださったキリストの中に、私たちが祈り求める平和があります。

祈り

天の父なる神、御子イエス・キリストの十字架によって、私たちに平和の福音を告げ知らせてくださり感謝します。時代の波が猛るときにあって、主イエス・キリストが教えてくださった祈りを切に祈ります。「御国を来たらせ給え、御心の天になるごとく、地にもなさせ給え」。キリストの平和が世界の隅々にまで、行き渡りますように。聖霊なる主よ、我らを平和の道具として用い給え。

平和の君、イエス・キリストの御名によって祈ります。　アーメン。

2015年10月22日　聖学院大学　全学礼拝（シリーズ礼拝）